

編集後記

吉田先生からバトンを受けて、最初の会誌をなんとか上梓できて、ホッとしているところです。英国ブライトンで行われたEFI・BSHI ミーティングからの帰途の飛行機で、成瀬編集委員よりの命でこれを書いています。十字先生は後ろで、坂内さんは右隣でぐっすりと御就寝ですが、左隣では徳永先生も編集後記を書いておられます。ブライトンのミーティングでは、DNA と DOB 遺伝子産物へのヘテロダイマー形成による新しいクラス II 抗原 DO 発現、HLA 遺伝子領域内の OLF (臭覚レセプター) 遺伝子とその多型性の発見、同領域の多数のマイクロサテライトのマッピング、HLA 抗原が認識する癌抗原ペプチドの同定など、数々のエキサイティングな報告が目白押しでした。MHC をはじめとする免疫遺伝学の分野は、まだまだ我々を魅了して止まないようです。本学会誌も、これらの魅力を本分野の人はもちろん、本分野以外の人にも、生き生きと伝えることができる会誌にしたいと思います。皆様のご協力とご理解をお願いします。(猪子 英俊)

新編集委員長のもと、皆で知恵をしぼって学会誌のスタイルを考えました。「MHC」の名にふさわしい多様性をもち、会員の皆様の関心とニーズに答えられる雑誌にしたいと願っています。(徳永 勝士)

第11回国際組織適合性ワークショップ、カンファレンスが日本で開催されたことを受けて、日本組織適合性学会が発足して早くも3年が経過した。既に3回の学術大会も盛大に開催され、学会誌も発行されることとなった。HLA に関する研究に携わって来た者にとっては誠にうれしいことである。

相沢前会長が日本 HLA 学の歴史を話される時、よく引用されるサンタバーバラの誓いから始まった組織適合性研究会が発足した当時は、未だ日本国内の研究体制も思うにまかせず、欧米各国の研究者の協力を得ながら、大変な苦労のもとでの研究であったようである。これら第一世代の諸先生方のご苦勞で日本の HLA 学はスタートした。

第一世代の先生方のご苦勞の結果、各先生方ご自分の研究室を構えられ、研究体制が一応整った所でこの研究分野が飛び込んできたのが我々第二世代である。当時はまだ日本独自で抗血清の検定をしたり、新たな研究分野を開発したりすることは非常に難しく、何か新しい発見があるといつも海外の研究者に相談するといった具合であった。第二世代には他の研究分野からこの分野に移って来た者が多かったから、第二世代の我々にとって当時の日本の HLA 学は非常にまどろっこしいとの印象を受けた。

その後、日本の HLA 学も大きく発展し、HLA 学自体が必ずしも抗血清の交換を必要としない方向に進んで来たこともあいまって日本独自の HLA 学の完成を見つつある。研究者も第二世代から今や第三世代とも呼ぶべき新鮮な人々が加わってにぎやかになった。

しかし、そのような背景が成立した日本組織適合学会は、今、なかなか難しい局面を迎えつつあるようである。つまり、免疫現象における HLA 抗原の役割がほとんど解明された現在、今後の HLA 学の中心課題は何なのか。基礎研究としての HLA 学と実用学としての HLA 学との関係は如何にあるべきなのか。どちらも難しい問題である。

そのような難しい時期だからこそこの日本組織適合学会の機関誌が果たすべき役割は大きいものであろう。この機関誌が学会諸兄の協力を得て、単なる研究成果の発表誌や技術情報の交換誌としてのみならず、日本の HLA 学の今後を考えて行く機関誌に成長することを期待したいと思う。(大谷 文雄)

思い起こせば、今から17年前、大学院生であった私は、初めて HLA という言葉を耳にした。その頃の私は、実験する度に出てくる反応結果が違って、HLA 抗原の存在に対して懐疑的であった。それがタイピング法の改良とともに反応性も安定し、懐疑心もいつのまにか消えてしまっていた。1985年頃になると HLA も遺伝子解析の時代となり、必然的に自分もその世界へと足を踏み込むことになってしまった。生来免疫学と化学を不得意としている私には、かなりの抵抗感があった。しかし優しい諸先生

方のお蔭で今日一人前のような顔をして研究ができるようになった。私と同じように免疫・化学を不得意としていながら HLA の分野に草鞋を脱いた方がかなり居られると思われるので、そのような方にも解りやすい機関誌として情報を提供していきたいと考えている。

(小林 賢)

本学会誌の編集委員の方々は日本を代表する HLA 学者？たちばかりです。そこに私ごとき者を加えていただいた理由はひとつしかありません。それは、血清学的見地から学会誌の内容を充実させるためです。しかしながら、血清学はつかみどころがなく、遺伝子解析のようにきっちりと数字で割り切れるわけでもなく、学問的に言葉や文章に表現しきれない部分がかかりあります。これをどう伝えるかが課題であり、私の役目ではないかと考えています。

ところで、先日、中央血液センターで血液センターの HLA ワークショップ会議が開催されました。これは、毎年行われており、当初は関東に所在する 18センターだけで活動してきたワークショップですが、本年より全国の機関センターと海外（アジア）の HLA ラボにも参加を呼びかけて行いました。会議には、HLA ママことタイの Dr. Chandanayingyong やソウル大学の朴先生らも同席され貴重なコメントを数多くいただきました。ワークショップの内容は骨髄バンクや HLA 適合血小板ドナーの登録のためのタイピング用抗血清の収集が主目的ですが、解析手段としてアレルタイピングのデータを併

用して血清学との相関なども見えています。今回は特にクラス I のアレルタイピングに力を入れて相当数のデータが得られました。血清学的に検出された抗原の variant とアレルデータとの比較により解決したのもあれば、全く新しいものであるものもいくつかありました。このように両方向から解析することにより抗原の発現抑制なども一例見つかっています。

このワークショップで得られたことなども含めふるって投稿して下さることを、読者のみなさんにお問い合わせいたします。

(中島 文明)

新しいメンバーでのスタートに紅一点（と私だけが思っているのは何故？）編集委員に加えて頂きましたが、まだまだヒヨコにもなれないタマゴ状態です。思えば、素人の私が初めて HLA にふれたのが LCT 法の為のリンパ球の分離でした。顕微鏡に現れたリンパ球のなんと可愛かったことか！ 以来 MHC 領域の解析が進むにつれ、これまで彼ら？が無言で訴え続けて来た多くのことが実証されてきました。今では DNA を扱うことが多くなり、リンパ球に会う機会はめっきり少なくなりましたが、これより先も彼らの“声”が少しでも聞けるように、今日も“リンパ球はウソをつかない”をモットーに頑張っています。猪子編集長のもと、MHC おたくの皆様へ愛される学会誌となる様精進致しますので、よろしく御指導願います。

(成瀬 妙子)